

幕末明治の写真師列伝 第三十八回 内田九一 その三

内田九一の他の親族については繰り返しになるが、『吉雄圭齋傳』（長崎県立図書館蔵）では、嘉永元年（1848）の記述に、「圭齋翁ハ廿四日ニ至リ親戚ナル内田九一及ヒ菊ニ接種法ヲ行ヒシ事」とあり、菊という名の妹がいたことが判っているが、この菊は後に長崎大黒町の素封家で、旧家の一つでもあった品川家の品川徳太に嫁いでいる。もう一人の妹の名はエイといい、こちらは長崎大光寺前の今籠町二十九番地で穀物問屋を営んでいた永見榮次に嫁いでいる。この永見家というのは長崎の銅座町で中央から来た文人、画家を歓待した文化人、永見徳太郎（永見家本家）の分家に当たる家であった。

内田九一、菊、エイの三人は、父、内田忠三郎が嘉永6年（1853）1月10日に長崎で流行した「トンコロリン」（「三日トンコロ」ともいう）、今でいうコレラで亡くなり、母、ヤスも安政5年（1858）7月26日に、再び長崎で流行したコレラで亡くなっている。内田九一の家は父が亡くなった後はしばらく財産もあったようだが、母が亡くなると親類に子供たちの世話をする者が無かったため、縁者に当たる医師、吉雄圭齋が引き取って面倒を見ることとなった。日本におけるコレラの発生は、宗田一『日本医療文化史』に拠れば、文政5年（1822）8月が最初であった。この第一次のコレラ流行から36年後の安政5年（1858）に、第二次のコレラ流行が起こった。

鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭時の生涯 伝記・松本順』（復刻版〈伝記叢書137〉大空社、1994年、元版は東京醫（医）事新誌局、1933年）の「十八 寫眞術開祖」には、「内田九一は上野と同じく弘化二年長崎の商家に生れた、八歳の折父に別れ十一歳の時母に別れ孤兒になった、この親籍といふのが心のよくない人達で幼少の孤兒を引取って世話する處か、寄ってたかって僅かな遺産を分割して持ち運んで了ふといふ不人情、良順かこれを見兼ねて外戚に當る吉雄圭齋と相談して塾に引取った。医者にするといふ訳ではなかったのだが留学生達の用を達たり、良順の給仕をしたりしてよく働くので良順や門生に可愛がられて居た。」と書かれている。

また、柴田宵曲編『幕末の武家 体験談聞書集成』（青蛙房〈青蛙選書7〉、1965年）の「松本蘭時」の項では、「日本で紙写しを盛んにやり出して、今でも人の知っている内田九一という男は長崎の者で、親父がコレラで亡くなった時は、九一が十三、妹が八歳で、財産はあったが親類で世話をするものが無くて、途方に暮れていたのを見兼ねて、私は九一を引取り、吉雄圭齋は妹を引取って養育した。」と記載されている。これは吉雄圭齋の妻、ゑむ（惠牟子）が、九一たちの母と姉妹の関係にあったため吉雄家に引き取られたのである。

さらに、『吉雄圭齋傳』（長崎県立図書館蔵）、『吉雄家系譜』（長崎県立図書館蔵）、古賀二郎『西洋医術伝来史』（日新書院、昭和17年）によれば、吉雄圭齋は、少なくとも内田九一とその妹「菊」には種痘を施している。

次に、内田九一の産まれた場所についてだが、「本邦寫眞家列傳（其十四）・故内田九一」（原田栗園『写真新報』第162号 明治45年3月）、『月乃鏡』（桑田商会 大正5年10月）「故内田九一先生」の項では長崎銅座町とし、齋藤月岑『増訂 武江年表（2）』「卷之九」（東洋文庫118 金子光晴校訂、平凡社、1968年）、『長崎県人物伝』（長崎県教育会、大正8年）、『大日本人名辞書』（大日本人名辞書刊行会、明治19年4月15日初版発行）、『明治維新人名辞典』（日本歴史学会編・昭和56年）などの後

年のほとんどの諸書では長崎万屋町とされ、長崎銅座町と長崎万屋町の、二つの出生地の記載が見られる。長崎万屋町の方は現在も長崎市万屋町として国道324号線を挟んで、市街電車の「観光通り」停留所からみて東北にあり、一方、長崎銅座町の方はこの停留所から南一帯の場所が銅座町である。さらに正確にいうと江戸時代の銅座町は銅座川のすぐ傍、川辺一帯の旧東銅座町がそうである。両方とも極めて近い場所とはいえその両方の町が内田九一の生まれた場所として伝わっているわけだが、そのどちらかが正しいとは現在のところ断定しにくい。

長崎万屋町は旧町名を本鍛冶屋町といい、延宝6年（1678）に萬屋町（現、万屋町）と改称された。萬屋町とは雑貨販売の店のある町を意味する。

江戸時代、長崎の中島川や浜町の海岸通りに回漕船が付き、榎津町筋が船宿になった時、その中間にあった本鍛冶屋町に萬（よろず）雑貨日用品を販売する店ができてくるようになった。鍛冶屋町の方はその後、長崎の発達に伴い郊外に移転したため、ここは本鍛冶屋町と呼ばれるようになったのだが、雑貨日用品を販売する店が増えてきたため、萬屋町と改称された。

一方、銅座町の方は江戸時代に貿易の決済用を使用する棹銅を铸造するために浜町裏手の海を埋め立てて、その築地に鑄銅所を設けたことから始まる。その後この鑄銅所は閉鎖されて、これ以後、この埋立地一帯は次第に商業地化して、幕末まで銅座跡の地名と呼ばれた。この銅座跡が明治元年（1868）7月に東銅座町、西銅座町という新しい町名になり、さらに同年10月に両町を合併して銅座町と改称、今日にいたっている。内田九一は当初、長崎銅座町に両親と住んでいたが、嘉永6年（1853）正月に父が亡くなり、その後安政5年（1858）7月に母も亡くなったため、その後、万延元年（1860）に長崎萬屋町で医師を開業していた吉雄圭齋の家に妹たち共々引き取られて、その後はこの吉雄家で養われていたのであろう。

また、内田本家があった場所はこの萬屋町であった。大正8年当時の長崎市萬屋町の地図で、萬屋町十五番地「長門商会酒類部」とある場所で、この場所は現在でも長崎市万屋町5丁目33番地長門商会ビルとなっている。

余談ながらこの萬屋町の長門商会について調べてみると、明治初年にこの長門商会は長門久治郎（兄）と西田金治（弟）に二人の兄弟が起こした会社であることがわかった。長門久治郎と西田金治の兄弟は長崎県島原の有家町出身で、弟の西田金治（長門家から西田家に養子に行く）が、古川町のお酢屋で修行をした後、萬屋町で独立して長門商会を起こした。萬屋町の内田本家の場所を長門商会がいつ購入したのかは不明。したがってこの長門商会は内田家とは何も関係がない。但し、このことは後年、内田九一の実家を第三者が語る際に、「今のお酢屋があるところ」とか、昭和37年頃は「お酢屋の長門商会」として有名だったことから、「長崎萬屋町のお酢屋があるところ」という言い伝えで語られた可能性がある。内田九一の実家は、「故内田九一経歴」では、長崎で代々「醗（にごりざけ）ヲ売り」「業ヲ菓種商ニ轉ジ 専ラ 出島大浦ニ出デ 洋商ト 相往來ス」とあるが、これもこの内田本家のことを指しているのではないだろうか。従って以上の事を考慮すれば、私は内田九一は両親の居た銅座で生れたと考えている。

（森重和雄）